Binスタートアップゼミ　論文のテーマについて

20230403　中尾俊介

１．前提

・卒業論文「リノベーションにおける住居観」（2011年度、建築学科卒論）

※学部は新領域・大野秀敏研究室：意匠系、都市計画より。

・修士論文「湊の開発史―幕末から明治初頭における湾内の変遷と神奈川・横浜地帯の形成―」（2013年度、建築学専攻）

・博士論文「横浜開港場の都市史研究」（2017年度、建築学専攻）

※大学院は建築・伊藤毅研究室：建築史・都市史

港湾設備の近代化と既存の都市空間の関係、都市社会や物流秩序への影響。

２．研究室で教わったこと

※修論は、修士1年で卒論ゼミ（読書会）に参加→修士2年5月に構想発表→7月に歴史系合同研究会で報告→12月にゼミ発表→1月提出。共同研究プロジェクトと並行。博論は年に1回ゼミ報告、共同研究は継続。

・批評的な読解（読む順番も考える／遅読）。要約、論文の構造を図表で整理、問や方法の吟味、言葉づかいに注目。→批評の文章化（テーマの検証、発展可能性なども）。

論文のメカニズム、著者の内在的な推移。学界における機能、研究史上の位置づけ。

・疑問から問へ（実態解明／因果関係／意味＝深層構造／概念レベルへの転回）。「一点突破全面展開」。

※明快で良い問いの設定→難しい。印象としては先生が指導することでなく共に考えること。

※テーマの自覚。モノグラフ／パノラマ、歴史／理論、古典的／現代的…。

※伊丹敬之『創造的論文の書き方』（有斐閣、2001年）。まずは風呂につかる。新しく、広く関心を持たれる問題、せめて面白い問題であること。10年もつ問い、一言で言える問い。数値から／歴史叙述から…。

・キーワードを考えること（≠新奇な言葉）。

・良い文章を研究すること（服部之総―稲垣栄三）。※実践できていない。ただ影響を受けている段階。

・（研究室での共同）オリジナルの情報を入手すること（一次資料。史料、実測調査成果、インタビュー…）。

・論文の目次。試験的に作り、構成を考える。

・引用と注：作法。他人の意見を明示すること、追試可能にすること。孫引きをしない。

３．実践から

・史料との関係

- 言いたいこと、考えたいこと／史料から読み取れること。

前者から始まって史料を読んで見解が変わること、後者から始まることが多い。

「無目的な史料読解を」と習う（関心によって理解が歪まないようにということか。加減がむずかしい）。

史料の探し方。横浜の場合、震災・戦災で横浜自体には少ない。横浜関係者から探す。目録ローラー。

新しい史料を読む／新しい視点から読む／めちゃ丁寧に読む。

- 史料の組み合わせ（自分自身、史料批判は心掛けつつも節操なく活用）。

- 史料批判。史料の作られ方、残り方から考えられること。意識的に残された記録が偶然残った結果。

→自分が読み取れていないことを常に意識。史料批判は単なる基礎的な作法ではなく創造的な作業。

・先行研究との関係

- どの流れに自身の研究を位置付けるか。

自身の作業フロー的には、先行研究調べ→史料を探し→読解（翻刻→現代語訳→読み取れることを絞りつくす）→先行研究（作業の振り返りと位置づけ）・史料探し（補足調査…のはずだが広がることが多い）→繰り返して、どこまで展望が描けそうかを考える→先行研究とすり合わせ→研究史への位置づけ

※これまで、実態解明→深層構造の検討…という形が多め。近世社会史の影響。

→自分がよくやる論証。ときどき見直す必要がある。

- 位置付ける段階で、主要な先行研究を選ぶ（めりはり）。基本的には学界で知られた研究が良い。

定期的な雑誌論文調査（斜め読み＋精読）。歴史学分野だと『史学雑誌』の「回顧と展望」。その他の学界展望、研究動向ノート。

- わくわくさせてくれる先行研究。その体験を大事にする。他の業績の追跡（直接関係しない事例も含む）。

個人的には、史料・史実の発掘、作業量、論理構成が優れた研究というより、考えさせられる研究。潮流を作る説得力（≒既往研究の整理の視点のシャープさ）。

修士…吉田信之（日本近世史）／博士…石井寛治（日本経済史）、伊藤毅

・振り返り、文章化

- 研究史における位置づけは、報告のタイミングでまとまることが多い。俯瞰する機会。

→定期的なまとめは重要（修士・博士では月１メモの作成：書き溜め作業でもある）。簡潔な説明。

→週報！

- 研究会等でのコメント、議論。発表している事柄について一番知っているのは自分。

→客観的にみた研究の意義、機能、方向性、方法。各自の研究の共通点・交差点について。

どうしても史料の所在に拘束されるが…。

- 史料を読んで考察をしていると説明しきれない具体的な情報の山になる→どう整理（叙述）するか。

※研究史におけるオリジナリティとともに、叙述の能力（＝教養と言われた経験）。

※戦後歴史学のグランド・セオリー／構造的な歴史叙述の先は…？

複雑なことを複雑に叙述すれば良いわけではない。ひとまわり上の世代の葛藤。

たたき台のみで終わらせたり、挑戦を諦めたりしがちの現状…。